

上代日本語における話材語「ほ」について

——話材語体系変遷考察の一環として——

清水 功

A Study on the Japanese Ancient *Wazaigo* * / Fō /

Isao SHIMIZU

1 は し が き

今日、一般には、何とうたがいてもなく用いられているいわゆる代名詞・いわゆる指示語の用法群には、実は、史的変遷のさまざまな段階の用法が混在し、一見、単純な法則下におかれているようにみえても、よく考えれば、複雑な様相がうかび上ってくるのである。

管見によれば、いまは（どちらかといえばラテン文典に範をとるかといわれる）西欧文法的な人称意識が底流にあるといえるのであろうが、実はさかのばればさかのぼるほど〈語として、専用の〉相手称ということができないものは見出すことができなくなり、もっと広い体系の中で、（西欧文法的な——どちらかといえば理性的・自我的な——人称に対して）感覚的な面からのゆるい体系がうかび上ってくる。この体系の構成要素となる語群は「場面」によって把握され（独りごとなどをもふくみ）「場面」によって示され理解を求めるものである。（その「場面」とのかかわりは、普遍的であり恒常的であり法則的であり、時折いわれるような「臨時的」なものではない。本来は、いわゆる代名詞も「場面」とのかかわりによるものであり、その「かかわりのしかた」が法則的であることはいうまでもないことである。）

なお、誤解をさけるために一言つけくわえると、表現としての「人称」的な語群がなかった（と考える）のは、それに類する意識がなかったということではない。（もっとも対象に対する言語を用いる時の意識のしかたは、「相手」というよりも、たとえば「畏れ」とか「自らの威厳の保持」——いわゆる自敬表現またはそれに近いものにあらわれる——などの面に力点がかかっているであろうし、いわゆる独り言のような場合でも、自ら知りながら独り言をいったり、くちぐせになったり等々の面はあろう。）この「相手」を示すことの専用の語を見出せないということは、たとえば上代のいわゆる「色彩」（に類する）語群についても似たようなことがあるだろう。いま、国語学（あるいは学的な考察の上に立っている「日本語学」の世界では、いわゆる「色彩」（に類する面）をあらわす（専用の）語は、アラ←→シロ アカ←→クロの計4種しかなかったと考えられている。それと同時に、別の出自の語をかりて、実にさまざまな（微妙なものまでの）「色」をあらわしている。（「むらさき」などは原料がはっきりしているが、「はねず」などは植物であることははっきりしていても、その植物がなかなか特定できない。しかし「衣服令」の「黄丹」にあた

るとされる色名の「ハネズ」はある程度染料を予想できる。——などさまざまなことを背後におきながら、上記のアヲ←→シロ アカ←→クロの4種と考えているのである。）

さて、先の話材語（いわゆる指示語・いわゆる代名詞をふくむ）について、いままで（40数年以前より）、中世から上代（あるいはそれ以前も推定）にさかのぼり、あるいは現代までおりて、他分野ともあわせ考察し、一部は活字にしてきたが、いまは、主としてをもとにそれよりできる限りさかのぼって（場面語の語中の）話材語の遷を考えることにしており、乙類の／お／段（・／－ō）についても／kō／、／sō／、／tō／、／mō／、／yō／についてのべてきた。・／(?)ō／、／nō／、・／wō／については順次、／－a／とも対比しながら折をみてのべてゆきたい。

以下、ここでは・／Fō／（橋本進吉博士の「上代特殊仮名遣」の中では甲乙の別をあげられていない。）に属すると考えられる「話材語」（あるいはその痕跡をとどめると考えられるもの）についてのべたい。

2 /ほのほ/について

今日、／ほのお／ともいわれる「火焰」の意をもつ語は、・「火のホ」と考えられ、語義の中には「熱をともなった突出した形状のもの、状況」を示すようである。古くは、単に「火焰」ととどまらないのは、『名義抄』にも「炎 ホノホ カゲロフ」とあるところからも（漢字の使用法をふくめて）推測することが可能と考えられる。なお、この語源的な見解は次の例／ひ／＋／の／＋／ほ／よりも類推することが可能であろう。

例1 見渡者明石之浦尔烧火乃保尔曾出流妹尔恋久（万・326）

この例の／ほ／（保）はかなり独立したものであり、かつ形状のみならず（たとえば光の強さから弁別性等）他の面からも突出していると理解されるのである。いま、この「突出した」ということを、他の上代の例よりみれば「いねのほ」であり、「なみのほ」等々ということになるだろうが、／ほのほ／の第3拍目の／ほ／は「必ずしも熱をともなわないで」とは・「その場面の他のものよりつきでている・めだっている」ということであろう。また、このこのよりもうかがわれる「火焰」自体の「きわだって知られる」ということがよみとられるのであり、（場面の中で）「他にきわだってすぐれた」という意が生ずるところであろう。

従って／ほのほ／は後には一種の「こと・もの」（神聖な感情——畏れ等の感——もとともなうとしても）としての「火（焰）」を示すものであっても、上代では（心理的にも）形状として「突出した」という意を失ってはいないと考えられる。なお、「ほのほ」の第3拍目（ふつう「穂」の文字であらわすことが多い）の上代（およびそれよりさかのぼって）の音韻体系を推定するとき、ここでは・／Fō／を示すのが適当かと考え、欧文表題および、以下にのべるところでは多く、それに従うこととした。（いうまでもないが、＊は理論的な推定によるしるし、／／はいわゆる音韻記号、Fは上代／は／行音の子音として推定されている「両唇摩擦音」を示す。）

3 *／Fö／（俊秀）について

先にのべたように「めだつ」中でも「すぐれている」というような感慨が加わっている用例は上代において多くみることができる。

例2 大王乃等保能美雪落越登名尔敝流安麻射可流比奈尔之安礼婆山高美河登保之呂思野乎比呂美久佐許曾之既吉安由波之流奈都能左加利等之麻都等里鵜義我登母波由久加波乃伎欲吉瀬其等尔可賀里左之奈豆左比能保流露霜乃安伎尔伊多礼婆野毛佐波尔等里須太家里等麻須良乎能伊射奈比立多加波之母安麻多安礼等母……奈我古敷流曾能保都多加波……祢毛許呂尔奈孤悲曾余等曾伊麻尔都気都流（万・4011）

「鷹はしもあまたあれども」（「多加波之母安麻多安礼等母」）その中でならふ鷹はないであろうとはこらかにおもった「その秀つ鷹」（「秀」の字をあてるのは、たとえば日本古典文学大系）のように（他に比べて）視覚的に比喻を使えばつきでているなど——すぐれている」ということであろう。

例3 昔伊弉諾尊目此国曰日本者浦安国細戈千足国磯輪上秀真国（袍国莽勾備）……（紀・神武紀）

この例は、相当に「美称」としての固定化がすすんでいると考えられ、従って本来的には（ある面では）対立的な「ま」（これもふつつ「美称」とされているが、「過不足なく満たしている」（筆者は「完満称」と名づけている）という意義の話材語（の固定化したもの）を共存しており、意味上の変化の大きかった例といわざるを得ないであろう。

4 *／Fö／の中核にある意義

例3にあらわれたような意味はすでに大きく変化したものであろうが、先にものべたように「場面の他のものごとよりつきでていることを示す」という表現のしかたが*／Fö／の中核にあると考えられる。

例4 青柳乃保都枝与治等理可豆良久波君之屋戸尔之千年保久等曾（万・4289）

例5 白雲之竜田山之滝上之小桝嶺尔開乎鳥流桜花者……最末枝者落過去祁利下枝尔遺有花者……客去君之及還来（万・1747）「最末枝」は通常／ほつえ／と訓む。

例6 為妹末枝梅乎手折登波下枝之露尔沾家類可聞（万・2330）「末枝」は、例5その他と勘案して、通務／ほつえ／と訓む。

例7 近江之海泊八十有八十嶋之崎邪伎安利立有花橘乎末枝尔毛知引懸仲枝尔伊加流我懸下枝尔比米乎懸……伊蘇婆比座与伊可流我等比米等（万・3239）

例 8 物不念路行去裳……橘之末枝乎須具里此川之下母長久汝心待（万・3309）

例 5～例 8 は仮学書ではないが意義の面から示唆されることが多く、意識としては単独に（多くは上方に）突出しているということをふまえているかと考えられる。このようなことが、前節の「すぐれている」という面につらなっていくのかとも考えられる。

例 9 於志豆伊奈等伊祢波都可祢杼奈美乃保能伊太夫良思毛与伎曾比登里宿而（万・3550）

表面には「奈美乃保」／なみのほ／（「波の穂」）があらわれているが、背後には「伊祢」（前の「伊奈」もあわせて）／いね・いな／というところより「稲の穂・稲穂」の意が「序詞」としてではあるがかくされている。水上の波とみのった穂波とは先の例群のように単独とは意識されがたいであろうが、もともとは）くだけの前の波頭・みのる前の穂の出るころ）上方につき出るという意味をふまえているのであろう。

5 話線語（場面語の要素）としての＊／Fö／

さて、ここで、他の「話材語」との関連をのべ、＊／Fö／もまた「場面語」の一環としての話材語と考えられることをのべたい。

筆者が、話材語（あるいはそれをふくめて「場面語」という考えをもつに到ったのは、（別々にたとえば「話線語」——「場面語」の一環——の中核をしめる「いわゆる接続詞」は接続という機能をもつものではなく、重要な機能は話線を示唆することにある——などと「場面」あるいは「面・場」よりの考察を必要を痛感したためということも原因となっているとは思ふが）いわゆる「人称代名詞」の上代における不安定さ（／な／は必ずしも「相手」を示すものではなく、「自分」を示す用例は枚挙にいとまがない。）、いわゆる「指示語」の「指示」という用語の矛盾、あるいは「近称」「中称」「遠称」という組織と実際の用例とのくいちがい、あるいは「相手称」なるもの——（人称代名詞をふくめて）——の用例の存在に対する疑問等をより出発して、上代と中古・中世・近世・現代をゆきつもとどりつしながらの結果であつた。（構想はごく早い時期からあつたが、それぞれの疑問点がいま思うほどには密接に結びついてはいなかったのである。

話材語群の各要素となる話材語が）そしてその一つ一つの用例が）ゆるい体系とはいいいながら、それぞれ密接に微妙に（しかも上代とはいいいながら、またそれ以前を考えればもちろん）歴史的経過もたどりながら対応しあっているのである。

ここでは、かつてのべた多くの用法・用例と対比させることはさておき、ただ 1 例「相手称」と一般的には考えられ、いまは、コソアド体系の中でもっとも問題ををはらむソ系のさかのぼった用例を次にかかげることにとどめたい。

例 10 天離夷等之在者波所此間毛同己呂曾離家等之乃經去者宇津勢美波物念之氣思曾許由惠尔情奈具左尔霍公鳥喧始音乎橘珠尔安倍貫可頭良伎氏遊波之母麻須良乎々等母奈倍立

而舛羅河奈頭左比沂乎瀬尔波左泥刺渡早湍尔水烏乎潜都追月尔日尔之可志安蘇婆祢波之伎
和我勢故 (万・4189)

信頼すべき辞典等でも、他に仮字書の適例がないためかこの用例をあげることが多い。また、筆者もかつて多くのソ系の上代の用例にかたはしからあつたが、(この用例をふくめて)「相手称」という用例をみとめることができなかった。

上の例10において第3句一般には／そここも／(／も／は万葉時代にはほとんど甲乙の別がないが、さかのぼって考えれば／sō kō kō kō mō／であろう。)とよむが、なぜ、／そここも／でないのか。もし／そここも／と訓んだとしてもこの例で母音音節のない字余りをみとめるのは適当であろうか。／そこゆゑにころなぐさん／以下で具体的な描写になるが、それ以前の短い部分が抽象的一般的であるのに、一箇所だけ「貴君のところ(越前)自分のところ(越中)」などと具体的になり、また抽象にもどるのか。思うに現代の(あるいは少しさかのぼった時代の)文法意識が先入見となっているのでこういう解があらわれるのであろうか。筆者は簡単にいえば「ドコモカシコモ」の意と考えるのである。そして「ソ」は決して近称とはいえない「位置をもって示す」(「力」にくらべて「はっきりと」という区別かと考えている)と対立して「まわり全体より限定的に理解を求める」とでもいうべき用法かと考えている。これを「顯然限定称」とかつて名づけた。

このように「場面」によって示すということからは、*／Fō／も何等ことなるところはない。ただ「場面」より示すということが、「場面」をはなれても、その「もの・こと」等と密着する時すでに「場面語」をはなそうとし、はなれていると考えるのである。おそらく地名としての／たかちほ／もそのようにして「場面語」から「普通」(場面をはなれてあまねく通ずる)の方へ移行していったものであろう。

例11 比左加多能安麻能刀比良伎多可知保乃多氣尔阿毛理之……大伴乃宇治等名尔於敝
流麻須良乎能等母 (万・4465)

記紀の伝承とよく符号するものであるが、どのくらいまで単に「地名」といい切ってしまえるか、なおよく勘えてみたい。

6 ま と め

先の上へ上へつき出ることからいえば「峻」の字で代表させることも適当かと思われる。また、性質が格段に充実し存在があきらかにされ理解されるという面から「秀」も加えて「峻秀称」と称することにする。これは(後にゆずるが)管見によれば*／FV／であらわされる多くの用例にも共通するのではないかと考えている。(Vはその時代に存在したことがあきらかな、あるいは推定される母音をあらわすことはいうまでもない。)

さて、この*／Fō／の「峻秀称」なる範疇は「限定称」「位置称」「満完称」等々と対立する概念で「場面語」の中の「話材語」の一環をなすものである。

清 水 功

付 記

「場面」「場」(さらに「面」),「話材語」「話線語」「待遇語」等の用語については下記その他を
参看されたい。

『国語学原論』(時枝誠記 岩波書店 昭16・12)

「『場面』と『場』」(高橋太郎「国語国文」昭31・9)

『文法と表現の基礎的問題』(清水功 中部日本教育文化会 昭50・10)

「言語における理解行為と場面論——日本語の話材語・話線語・待遇語を中心に——」(清水功
「梶山国文学」昭55・2)